

『神の愛を現す“教会”』 (要旨)

I テサロニケ 1:2~5

今週の聖句 Iコリント 13:13

使徒パウロはテサロニケ教会の信者に手紙を送りました。手紙の冒頭の挨拶は神への感謝です。それはテサロニケの信者が、福音のことばによってその生き方が変えられたからでした。使徒パウロは、テサロニケ教会の「信仰」、「愛」、そして「希望」を思い起こして神に感謝しています。今朝は、2~5節を通してパウロの感謝の源泉に注目します。

1. 「いつも神に感謝しています」(2)

使徒パウロはシルワノ、テモテと一緒に感謝の祈りをしていました。「あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています」(2)と。

→テサロニケのクリスチャンが完全無欠な信仰者であったから感謝をしたのでしょうか。

「怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をし、すべての人に対して寛容でありなさい」(同5:14)

また、倫理的、実際的な勧めをしなくてはならない問題もありました(同4:1-8)

▷テサロニケ教会にはさまざまな問題がありました。それでも使徒パウロの心に感謝があふれていたのは、「神」がテサロニケ教会に恵みを注いでおられることを覚えたからです。

2. 「覚えて」、「思い起こし」、「知って」(2-4)

使徒パウロは、感謝のわけを「…覚えて」いるから(2)、「…思い起こして」いるから(3)、「…知っている」(4)からと説明します。ただ漠然と「感謝している」(2)と述べているのではないのです。テサロニケ教会のクリスチャンの実際の歩みを見聞きし、神に感謝しています。

3. 「信仰」「愛」「望み」(3)

使徒パウロは、信仰者の主要な性質に「信仰」、「愛」、そして「望み」の三つを挙げます。たとえば、

「こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。」Iコリント 13:13

この三つの性質は互いに連動しています。使徒パウロはテサロニケの教会の「信仰」、「愛」そして、「望み」を思い起こしました。

(1) 「信仰」から出た働き

テサロニケ教会のクリスチャンにとって、神への信仰は「働き」に現れました。異教の神々の

崇拝者が、天地の創り主なる神を信じるということは、木や石、土などでつくった像を拜む生活をやめるということです。それは神を信じると以前の生き方とは訣別することを意味しました。

「偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになった」(1:9)

▷信仰とは生きて働くもの(参照:ガラテヤ5:6)

(2) 愛から生まれた労苦

次に、テサロニケ教会には愛が現されてきました。「愛から生まれた労苦」とは何でしょう。

「労苦」(ποσ):「打つこと」(beating)の意。そこから、重荷、労働、難儀を意味する用語として用いられています。

「愛」(αγαπε):キリストが罪人のために死なれたことを示す「愛」(参照:ヨハネ3:16,ローマ5:8, Iヨハネ4:10)

ここで言う「愛」は価値ある者に対する愛ではなく、取り柄のない者に対する愛を指します。見返りを期待して「労苦」するのではなく、「愛」ゆえに「労苦」するのです。

(3) 望みに支えられた忍耐

テサロニケの教会はマケドニアとアカイア地方の信者にまで良き影響を及ぼしました。その一方で、敵対者の攻撃も少なくありませんでした

(2:14)。ここで言う「望みに支えられた忍耐」は、嵐が過ぎ去るのをじっと待つという受け身の意味合いではなく、来るべき主イエスの再臨に基づく希望(望み)を持ち忍耐していたのです。

4. 私たちの福音は、ことばだけでなく(5)

パウロは言います。「私たちの福音は、ことばだけでなく…」(5)

福音のことばは、テサロニケの信者の生き方を変えました。完全無欠ではないけれども、神の恵みが注がれているテサロニケ教会。パウロは『神の愛を現す“教会”』を見て、神に感謝をささげるのです。

